わがまちが生んだ偉人

偉人から読み解く「私有か共有か」のヒント

岩田太郎 Iwata Taro

良質な養種開発を全国に発信

昭和50年2月20日発行の『広報もりや』に「忘れられた郷土の先覚　岩田太郎翁」という記事が載っている。岩田太郎(1871―1936)は、養蚕業に欠かせない蚕の卵である蚕種(さんしゅ)開発とその普及で全国に名を馳せた人物である。

記事は岩田太郎(以下太郎と略)没後に建立された「岩田太郎翁紀功碑」の設置場所をめぐる思いが述べられた文章で終わっている。顕彰碑は、当該人物の生誕地や当人が活躍した場所などに置かれるのが一般的である。ところが「同紀功碑」は違っていた。

著者は記事の中で「紀功碑を何故に異郷である関城町へ移したか、また移そうとしたとき、郷土の人びとはどうしてそれを翁の郷土である高野へ置こうとしないのか、亡き先覚者を遇するにあまりにも冷淡ではなかろうか」と嘆いている。

同紀功碑をめぐる設置・移転場所は後に触れるとして、まず太郎の功績をみておこう。

明治時代、殖産興業の一翼を担った製糸業は、輸出産業の花形だった。その製糸業を支える養蚕業は、良質な蚕種に左右される。良質な蚕種開発は、養蚕業にとって大きな課題だった。

太郎の父は、蚕種研究に取り組み、現在の多摩地域山梨、群馬などに蚕種を販売していた。太郎は父の跡を継ぎ、自らも蚕種開発に取り組み、成果をあげるまでになった。

太郎は、その成果を発信する『蚕業之灯』の発刊とその技術を伝える「養蚕伝修所」(後に「蚕業講習所」と改称)を設立した。いずれも明治29年(1896)、太郎25歳の時である。

同所は、北相馬郡高野村(現守谷市高野)の屋敷内に建設。『蚕業之灯』の読者は1万5千人余、講習の受講を希望する者も全国から殺到。定員30名2期制の講習から、学舎増設して3期制にして対応した、という。

明治35年(1902)、太郎は同志と共に、大日本蚕業研究会を創設。会員数は4千人余を数え、太郎の名は全国に知れ渡った。

しかし、国内産業は重工業に比重が移り始めていた。大正13年(1924)、第24回生を世に送り出したのち、同所は閉鎖された。

昭和11年(1936)、太郎はこの世を去った。長逝が伝わると、故人の業績を後世に残そうと「岩田太郎翁紀功碑建立賛助会」が結成された。

同紀功碑は、昭和16年(1941)、東茨城郡常磐村(現水戸市愛宕町)に本場があった茨城県蚕業試験場の敷地内に建立された。

同試験場は、真壁郡関城町関本(現筑西市関本)に支場があった。昭和37年(1962)、本・支場の統合が図られ、県蚕業試験場は関城町に置かれることになった。これに伴い、本場に建立されていた同紀功碑も関城町に移転した。

このことが『広報もりや』に載った「何故に異郷である関城町へ移したか」という指摘の背景にある。『守谷町史』は、その後の動きを「最近守谷町の有志によってその碑を太郎の故郷たる守谷町に移す運動が起こり、やがてそれが具体化することになる」と紹介。

昭和60年(1985)、同紀功碑は関城町の同蚕業試験場から、始まりの地である守谷町高野(現守谷市高野)に移転された。故郷に建った紀功碑は、太郎の進取と共有の精神を地元に発信し続けることだろう(文中敬称略)。

主な参考文献
『守谷町史』(昭和60年、守谷町発行)、『茨城蚕糸の歩み』(平成2年、「茨城蚕糸の歩み」編集委員会編集、茨城県農林水産部蚕糸課発行)、『広報もりや』第124号(昭和50年発行)。

守谷市立高野小学校正門左脇に建つ「岩田太郎翁紀功碑」＝守谷市高野(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長
冨山章一